

サラリーマンの最大の関心は、組織内での自分のランキング（序列、出世）であろう。「俺はそんなことに関心はない、仕事がやれるだけで満足」という人はたしかにいるし、こういう人が「高潔な人格」といった言葉で評価される傾向がないわけではないが、これはむしろ、**出世のために必要な努力を放棄し、その結果、出世に関心がなくなったケース**と考えたほうがいい。

ランキングを上げるのに最も手っとりばやい方法、と考えられやすいのはいわゆる「目上の者の足を引っ張り、同輩を蹴落とす」という例の手である。

しかしこれは最後のそろばんを弾いてみれば損だ、ということが体験的にわかっているのに、仕事の面で好成績を残すしかない、という、あたりまえのことしかないわけだ。

戦国乱世の荒々しい雰囲気は、武術や武器というものの比重を重くする。どうすればより多くの敵を斃(たお)せるかについて体系的な理論と技を持つものが現われ、それが「**兵法家**」と呼ばれるようになってきた。

しかし、吉岡家が染物を本業としていたことでもわかるように、**剣法を論じ、技をみがくのはあくまで芸能の一つ**であった。茶道や能狂言と同じ仲間である。

『五輪書』は「序の巻」以下「地・水・火・風・空」の五巻から構成されている。「五輪」と名づけられたゆえんだ。門人の寺尾勝信にあてた形式をとっているが、いわゆる秘伝ではない。

各巻の内容を簡単に説明しておこう。

「地の巻」

いわば原則編。二天一流の基本的な考えかたを説きながら、兵法とは何か、二刀を使用することの意味、等々について述べる。

「水の巻」

鍛錬編とでもいうべき巻である。兵法を実践するにあたっての精神のありかたから説きおこし、実際に剣を使って闘うときの心得が、きわめて具体的に説明されている。次の「火の巻」とあわせて『五輪書』中の実践論の部分にあたる。

「火の巻」

一対一の試合から合戦まで、実際に戦闘の場に出たときの心がまえ、体験から得た多くの教訓を、心理的に、あるいは力学的に納得のゆくよう、じつにいていねいに説明してある。

「風の巻」

他流批判の編。いちいち流派の名前はあげていないが、宮本武蔵がただ自分の流儀にだけ固執していたのではなく、他流の特徴をくわしく考究していたことが知れる。諸流の兵法で最も力を入れているポイントが、武蔵の批判をあびるとたちまち大欠点になってしまう。もちろん他流を批判することが目的ではないのであり他流との比較のなかから二天一流の本質をくり返して説明している。「水の巻」「火の巻」のような華やかさはないけれども、見方によっては『五輪書』のなかでいちばん興味ぶかく読まれるところであろう。

「空の巻」

結語にあたる。乱世を一人で生きぬいた男の世界観ともいうべき境地が吐露される。

本書では紙数の関係もあり、短文の「空の巻」についての解説は省略せざるをえない。ここで、紹介しておくことにしよう。

「〃空〃 というのはもちろん何もないところをいうのである。ものごとがあるところをすべて充分に知りきってからのちになってはじめて、何もないところ——空を知れるのだ。それが〃空〃 である。世間ではよく、まちがった物の考えかたをしているので、ものごとの道理がわからなくなったところを〃空〃 だとしているようだが、これはほんとうの空などではなく、ただの迷いごころにすぎない（略）。武士たるものは、兵法の道をしっかりと体得し、その他の武芸もよく学び、武士としての正しいありかたについてよく心得、心を迷わすことなく、朝に夕につとめ、心・意のちからを養い、観・見の二つのちからをみがき、迷いの雲をぬけ出たところこそ真の〃空〃 なのだと思わなければいけない」

武蔵の文章の末尾のほとんどは「よくよく工夫すべし」「よくよく吟味すべし」「よくよく分別すべし」で結びになっている。

これは一見、冷たく突きはなしているようでもあるが、それよりは、読む者の心理をまず実地の鍛錬に向かわせる効用を狙っているのだと考えるのがよいと思う。

・・・

「よくよく工夫すべし」——何を、どうやって。

実際の心身鍛錬は、こういうところにはじまったほうがよいのだ。

口伝（くでん）

武蔵も「兵法ではすべて先手先手とついていかねばならないのだが、構えるのは先手を待つことになってしまう」といっている。

二天一流の剣法を覚えさせるのが目的ではないのだ。剣を習おうとする人に、誰と斬り合っても決して負けることのない、ぎりぎりのところの技を身につけさせるということ。いいかえれば、その人の能力が剣において一分の残りもなく引き出されるようにしてやること、これが二天一流だということになる。

この章の終わりに、もうひとつわたくしのいいたいのは、宮本武蔵の生きかたや剣法論にあらわれている徹底した合理的な態度である。

たとえば彼のやりかたには、自分の技では勝てないと思う相手とは闘わないようにしているところがありありと認められる。

b 武蔵の兵法は二天一流、または二刀流・円明流とも名付けられている。

『五輪書』の内容を短く要約するのは簡単なことだ。つまり「このようにして勝つ。よく自分で工夫せよ」というものだ。

「このように」のところが実にこまかく、手を取って教えるように書いてあって、その点で他書の追随を許さないのだ。

相手にすべきものは敵の身体ではなく、敵と場との関係だということがわかってくれば、「難所へ追いつめてゆけ」という説明がただひとつの勝ちかたなのだという事も理解されてくるはずである。

敵側の条件を一つずつ悪くしてゆく——たとえ一瞬のあいだに勝負がきまったとしても、勝利はこのような順を追って近づいてくるわけだ。

「難所」ということを考えないと、**敵の身体だけを追いかけ廻すことになる。**

だいたい、人が武芸を学ぶのに、**受ける・かわす・くぐる**ということばかりをいつもやっていると、心がそのことにばかりひかれてしまい、**敵にひきずりまわされる**結果になる。兵法の道は正しくまっすぐなものなのである。正しい理論にしたがい、**敵を追いまわし、相手を屈服させる**ような心がけでありたい」